

2008（平成 20）年度 東京大学 入試問題 第 1 問 解答例

一

曖昧さを排除し、史実の画定を図る歴史学自体が、記録と不記載、事実、可能性、虚構を含む曖昧な全域の情報に拠るということ。

* 構文＝歴史学は～に依拠している（基づく）、の意は必須。

* 「この巨大な領域」＝曖昧（画定不可）な（領域）＝「書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったこと」（簡潔に置換すること）。単に「事実として書かれなかったこと」などは、不可。

二

歴史は、膨大な記憶のうち、国や社会の代表的価値観で中心化され、成員の自己像を構成する記憶とその操作であるということ。

三

記憶は、記憶を局限し、一定の中心へと等質化した人間の歴史より量的に巨大で、歴史以前の物質や遺伝子の形態をも含むから。

* 並列構造は必須ポイント。

記憶の「ひろがり」＝量的に歴史をはるかに上回る

記憶の「深さ」＝物質、遺伝子の記憶形態・の延長上の歴史

四

歴史の語義自体が、現存する全成果の集積として、個人の生を決定すると抑え難く感じさせる、ある種の属性を持つということ。

五

歴史は、個人と集団の記憶とその操作であり、現存する全成果の集積として個人の生を決定する。しかし、個人は過去の無数の他者の言動や精神の痕跡とともに生きつつ、自由な選択や行動を試み、強制力・決定力に抵抗し、その集積や混沌が歴史となるということ。（一二〇字）

六 a 散逸 b 超越 c 機会 d 信仰 e 矛盾